

展望

学生文化への関心
自分の研究をふりかえる

武内 清

私の専攻は教育社会学で、その中でも、学校や大学の制度や文化の仕組みを、生徒や学生の側から見ていこうとするものである。

教育社会学は、教育の社会的側面に関心を向けているので、あまり個人的なことに言及することは少ない。教育学の研究者の研究テーマや教育内容は、どこかその人の生い立ちや教育歴が関連しているように思われる。教育社会学の研究者にもそれが言える。個人の成長過程でさまざまな経験が知らないうちに研究に反映される。

方の指針にしていたが、学生運動が挫折した後の世代は、フロイトやユングなどの心理学を読んで生きた指針を探し始めた。社会的要因を抜きに心理的に解決しようとする心理主義が蔓延している。このように感じている社会学者は少なくない。しかし、社会学研究も、心理的な側面も取り込むようになっていく。また逆に心理学も社会的側面を取り込むようになっていく。社会学と心理学の研究は接近しつつある。

自分自身のことを振り返ると、伝統のある自由な雰囲気のある都立高校で過ごした三年間の高校生活は、その後の研究テーマに影響を与えている。受験競争の真只中ではないが、H.R. 生徒会活動や部活動が重視された当時の都立高校の雰囲気は驚きであり、大変影響を受けた。しかし、東京の中流上層階級の文化を反映した都立高校の学校文化は、中の下階層出身の私には適応が難しかった。クラスメイトのするスポーツは私には馴染みのない硬式テニスやラケットであり、話題は私の知らないゴダールの映画であったり、ジャズの音楽であったりした。政治意識も高く、安保反対のデモに参加する学生も少なからずいた。英語の授業では、「動物農場」「ワインズバーク・オハイオ」「月と六ペンス」といった文学的な作品がサイド・リダーとして指定され、皆々とならんでいた。学校文化と出身階層と

近頃の大学院生の研究テーマは、自分探しになっている。研究は自分のために行うのではなく、社会のために行うものである。テーマは、社会的なものが選ばなければならない。これは、年配の教育社会学の研究者が、若い世代の研究テーマに関して共通に持っている感想である。しかし、教育社会学の研究といえども、個人的な経験がどこか研究テーマに結びついているのではないかと、自分探しと社会的な問題との結びつきが可能ではないかと感じてきた。

学生運動の世代は、マルクスや吉本隆明などを読み生きている。関係に関心をもちたのは、この高校時代の文化体験（葛藤）にもつながっている。

都立高校の高校の学校文化をやっと少し身につけて、大学に入学したと思った。そこは全国津々浦々から学生が集まった「田舎文化」の蔓延した国立大学で、また文化葛藤を味わう羽目になった。このような出身階層、地域と学校（大学）の文化葛藤、個人のハビタス問題は、現在の私の研究関心に底流している。

高校の格差、高校生の生徒文化

団塊の世代の子もが学校に入学、進学するようになった時、その量の多さからさまざまな教育問題が起った。特に、団塊ジュニアの高校進学時には、各県で高校増設が相次いだ。

大学院・助手時代、私の参加した共同研究に、「高校の適正規模の総合的研究」（研究代表 清水義弘・東京大学教授）というものがあった。それは、これから各地で新設される高校を、どのくらいの規模のものにするのが適切かというきわめて時宜にかなったテーマの研究であった。

共同研究者で手分けして、調査の依頼の為、各地の高校を訪問した。私は生徒の学校生活の側面から、どの規模の

高校が、高校生の学校への適応や進路にどのような影響を与えるのかを検証した。しかし、データからは学校規模と高校生の学校適応や進路に何ら関連が見出せなかった。困り果て、そこに大学進学率で分類した「高校の格差」という変数を投入してみると、「高校の格差」に生徒の生活や意識の連がはつきり分化していることを発見した。高校生の生活や意識（生徒文化）の特徴は、進学校では「勉強文化」（Academic Subculture）、準進学校では「遊び文化」（Fun Subculture）、非進学校には「逸脱文化」（Delinquent Subculture）が優位になることが統計的に明らかになったのである。学校規模より「高校の格差」が、生徒文化を分化させる要因になっていた。また、伝統ある進学校では指導体制が確立しているため、学校規模を大きくしても、教科指導や生徒指導の問題は起らないが、新設の非進学校で大規模校になると指導が確立していないため、生徒の逸脱行動が発生しやすくなる指導が難しくなっていることもわかった。この調査研究から、学校格差と生徒文化の関係、さらにはそれらと学校経営の関連に関して、新しい知見を得た。

個人の研究では、出身階層がほぼ同一の私立進学校高校で、「私」としての高校生活」というテーマのレポートを書かされたところ、その内容と学業成績（全教科）との間には、はつきりした関連があることがわかった。成績上位者は勉強を持っていた。

当時、大学生の実態を客観的に明らかにしたいと、ゼミの学生たちと大学生を対象にした調査を、二、三年に一度実施し報告書を刊行してきた。学生と共同作業をする中で、学生の視点を取り入れられるようになったのである。

「現代大学生の意識と行動」武蔵大と五大学・一短大の比較（一九八二年）では、六大学八百七十一名の学生を対象にアンケート調査を実施した。大学ごとに学生の意識と行動の差異をデータで検証した。「大学レジャーランド志向」「アカデミック志向」「サークル志向」「クリスタル志向」「就職志向」という大学生の行動類型も因子分析から抽出した。

「大学生の受講態度とその関連要因の研究」（一九八五年）では、学生の授業時の座席の位置が、受講態度のみならず、日頃の行動やファッションにも関連しているという仮説で、三十三教室で（教室三人）百名の学生の受講態度を観察した。同時にその学生（およびその周辺の席の学生）に授業後アンケートも実施し仮説を検証した。前の座席の学生は受講態度が熱心で校外でもまじめな行動傾向の持ち主であり、後ろの座席の学生は授業中聴講以外のさまざまなことをし、遊び志向が強いことが明らかになった。座席とファッションの関係は明確にはみられなかった。フアッ

強文化、成績上位者は遊び文化、成績下位者は逸脱文化、無気力な生徒文化が優位となっていたのである。学校間の格差同様、学校内の格差（成績）も、生徒の行動の規定要因になっていたのである。

「生徒文化」の研究は、ベネッセの「モノグラフ・高校生調査」で、その後継として行った。

大学レジャーランド時代の学生文化

大学生の学生文化への関心は、都内の私立大学に専任講師として勤務し、学生たちと接している中で芽生えた。勤務した中堅私立大学の学生の大学生活は、私の通った国立大学のそれとは大きく違ったものであった。

当時「大学のレジャーランド化」が言われた時代でもあり、学生たちは過酷な受験勉強から解放され、企業戦士として働くまでのつかの間の四年間の休息（モラトリアム）を楽しんでいた。学生たちは、受験競争で敗れた傷も負って、その傷を癒すために、レジャー（遊びや交友）に没頭していた。サークル活動、コンパが盛んで、その資金のためのアルバイトもして、授業への出席率は二三割程度であった。テレビドラマ「不揃いのリング」で（山田太一）でも、同様の大学生像が描かれ、学生たちは共感を

シオナルな学生は、後ろの席に座っているのではないかと、という仮説であったが、それは検証されず、彼（彼女）らは、授業に出ていないと推察された。

「大学におけるゼミナール、演習の内部過程に関する実証的研究」（一九八六年）では、ゼミに教員のパイソナリティや教育観の違い、それに対応して集まってくる学生のタイプの違い、実際のゼミの進め方も違っているのではないかという仮説のもとに、武蔵大学の二十二のゼミ、演習で、「担当教員へのインタビュー」「学生へのアンケート」「実際のゼミの参与観察」の三つの調査を行った。「講義型」「対型」「討論型」という三タイプのゼミ・演習の型が見出され、ゼミへの満足度は「討論型」で高いなど、ゼミごとの違いを詳細に明らかにした。

「都市における人間の動態の考察的調査」（一九八八年三月）および「現代大学生と若者の生活の社会学」試験、サークル活動、部室、価値観、恋愛観、悩み、話し方、余暇、待ち合わせ行動、ライフスタイルの分析」（一九八八年五月）では、大学生や若者の行動を考察する調査（観察やアンケート調査によって明らかにした。大学生の試験前のノートの貸し借りや部室の様子など、大学生のさまざまな行動が客観的に明らかになった。

これらの学生との共同作業で感じたことは、中堅私立大

われわれの研究チームで実施した「十二大学、学生調査」のデータでみると、「大学生活の比重」に関して、「部活サークル」の比重は減少して（一九九七年の〇・〇％→二〇〇三年五・六・六％）、「学業、勉強」の比重が高まっている（五〇・七％→五五・九％）。勉強重視の傾向は、他の回答でもみられる。大学の授業への出席率が上がっている（八〇％以上）六二・六％→六七・一％、「先生との関係」への満足度が上昇している（七ポイント増）。「試験やレポートで評価するより出席を厳しく」と希望（九・三ポイント増）、「大学は多様な体験の場」というより学問の場」と考える（八・八ポイント増）、「学生の自主性に任せるより教員の指

なバブル世代の学生の姿である。就職も売り手市場で、楽々と就職の内定を得ていた。そしてその後、バブル崩壊の不況期を経て、就職難になり、学生たちも就職のことを気にして「まじめ」になり、遊び志向の学生は少なくなっていた。これらをささげ、な大学生調査のデータからも明らかにした。

全国大学生協の調査で、大学生活の重点を、一九八〇年と二〇〇六年を比べると、「豊かな人間関係」（三四・七％→一六・九％）が減少し、「勉強第一」（一九・五％→二八・三％）と「ほどほど」（一〇・六％→一九・六％）が増加している。

「新開大学」の学生は、部、サークル活動参加率は低い。授業には熱心に出席しているが、それは将来の職業に役立つ資格を取るためである。大学に求めるものは、資格に特化した専門学校のなかであるが、充実した毎日が送れているわけではない。一方、「伝統総合大学」（上智大学はこれに入る）の学生は、部、サークル活動に参加し、大学生活を楽しむ、今の大学に満足しているものが多い。自分に対する自信もある。大学に資格より、幅広い教養やさまざまな体験を求めている。中堅大学はその中間である。

学の学生の仲間志向の強さ、そして共同作業での力を発揮するという点である。ゼミ時間の何倍もの時間を仲間と共に作業し、水準の高い報告書を書き上げた。仲間との共同作業の為に自分の時間を犠牲にする人の良さを備えている。

「ゼミの友人とお酒を飲んでいても、結局最後は調査のことで終わってしまう日々を過ごしました。こんな人間と仲良くできたり、信頼したりしたことはなかったでしょう」「新宿駅でスキヤキに行くギョーラ達を横目に、[なんでも春休みなのに大学へいかなきゃいけないのか]と思いついて最後まで付き合っていました」「じゃあ、明日総研（総合研究）十時半に」一体幾度の台詞を聞いたのだろう。煮詰まりもうドロドロ。何時しか人間関係は険悪になり、心は古くさいようにポロポロになっていた。ああ、ゼミとはこんなに罪作りなものであったのだろうか。春休みは霞のように消えていったのであった。青春なんてこんなものさ——このような感想が、報告書のとがきにも多く書かれていた。

このような、共同作業、ゼミ時間を越えた報われない作業は、個人主義的な傾向が強い偏差値の上位の大学ではなかなか成立しない。中堅の大学には、損得を抜きにした仲間志向の強い学生文化が育っていると感じた。

バブル期、バブル崩壊後の大学生

「アクロス」一九八九年五月号の特集「ワガママエースはどこへ行く」には、バブル期の女性の贅沢な生活が描かれている。当時これを参考に、「上智エース」の一日を学生に描いてもらった。次のような当時の典型的な女子学生像が描かれた。

朝は早起きして、授業に真面目に出る。「熱心に聞く講義」「出席して割り当てた課題は必ずいい語学の講義」「出席のためだけの講義」を使い分ける。キツイ体育系の部は避け、気が向いた時だけ出ればいいサクル（テニス同好会）に所属。そこで男の子とのつきあひも自然とできる。同性同士で群れることが一番楽しい。教室で、学食で、茶店で女同士のおしゃべりは続く。八時前に帰宅し、母の料理を食べ、家族とくつろぐ。話題のテレビ番組、好きな音楽、好みのシャワーに囲まれ、穏な一日が終わる。

これは、豊かな社会の恩恵を十分に受け、自分の義務（授業に出ること）は最低限に果たしながら、自分の好きなこと、自分の好みに合うことをしたたかに遂行する豊かな

大学生文化の特質と大学教育

大学生の学生文化は、高校生のそれより広範な広がりを持つ。大学生の勉強文化は、大学の学問や授業のあり方とも関連し、また大学外の知識の営みとも連動している。大学生の遊び文化は、時代の最先端を行く青年文化と結びつき、流行や情報メディアとの結びつきが密でマニアックになる。非行文化は過激なというよりは、大人文化への対抗性を強め、対抗文化（カウンター・カルチャー）としての特徴をもつ。現代の学生は、大人や教員に対する表の意味を無化する戦略をとっている。私語や代返、ネット情報のコピーなど、いつの時代も教員と学生の攻防は続いている。

現代社会の学生の特質に見合った大学や教育のあり方について、私見を述べておく。

第一に、大学の授業では、情報の収集やその処理能力、集団討議の中でのことを決定していく能力など、社会で必要な一般的能力を培っている。その潜在的な能力が社会で生かされる。また学生は、大学における学問（知）を媒介にしたさまざまな活動を通して人間的に成長する。大学教育

- 学内共同研究報告書。
- (3) 武内清編「学生のキャンパスライフの実証的研究——十一大学、学生調査の分析」科研報告書、二〇〇五年。武内清編「現代学生の生活と文化——学生支援に向けて」科研報告書、二〇〇七年。
 - (4) 武内清編「キャンパスライフの今」（玉川大学出版部、二〇〇三年）。
 - (5) 武内清編「大学とキャンパスライフ」（上智大学出版、二〇〇五年）参照。

筆者は総合人間科学部教育学科教授（教育社会学）



イニスとキリスト教	増田 昭	74
初期キリスト教と古くはエニクス会	島田 昭	75
大学とグローバル化	比佐 一	111
学生文化への関心	武内 清	113
「上智エース」	武内 清	114
「上智エース」の今	武内 清	115
「上智エース」の未来	武内 清	116
「上智エース」の過去	武内 清	117
「上智エース」の現在	武内 清	118
「上智エース」の将来	武内 清	119
「上智エース」の歴史	武内 清	120
「上智エース」の文化	武内 清	121
「上智エース」の教育	武内 清	122
「上智エース」の社会	武内 清	123
「上智エース」の国際	武内 清	124
「上智エース」の環境	武内 清	125
「上智エース」の健康	武内 清	126
「上智エース」の安全	武内 清	127
「上智エース」の安心	武内 清	128
「上智エース」の信頼	武内 清	129
「上智エース」の誠実	武内 清	130
「上智エース」の責任	武内 清	131
「上智エース」の正義	武内 清	132
「上智エース」の平和	武内 清	133
「上智エース」の自由	武内 清	134
「上智エース」の平等	武内 清	135
「上智エース」の尊重	武内 清	136
「上智エース」の忍耐	武内 清	137
「上智エース」の寛容	武内 清	138
「上智エース」の謙遜	武内 清	139
「上智エース」の虚心	武内 清	140
「上智エース」の誠信	武内 清	141
「上智エース」の厚道	武内 清	142
「上智エース」の温厚	武内 清	143
「上智エース」の仁慈	武内 清	144
「上智エース」の良善	武内 清	145
「上智エース」の淳厚	武内 清	146
「上智エース」の忠厚	武内 清	147
「上智エース」の至厚	武内 清	148
「上智エース」の純厚	武内 清	149
「上智エース」の豊厚	武内 清	150

ソフィア	目次
「上智エース」	増田 昭
「上智エース」の今	島田 昭
「上智エース」の未来	比佐 一
「上智エース」の過去	武内 清
「上智エース」の現在	武内 清
「上智エース」の歴史	武内 清
「上智エース」の文化	武内 清
「上智エース」の教育	武内 清
「上智エース」の社会	武内 清
「上智エース」の国際	武内 清
「上智エース」の環境	武内 清
「上智エース」の健康	武内 清
「上智エース」の安全	武内 清
「上智エース」の安心	武内 清
「上智エース」の信頼	武内 清
「上智エース」の誠実	武内 清
「上智エース」の責任	武内 清
「上智エース」の正義	武内 清
「上智エース」の平和	武内 清
「上智エース」の自由	武内 清
「上智エース」の平等	武内 清
「上智エース」の尊重	武内 清
「上智エース」の忍耐	武内 清
「上智エース」の寛容	武内 清
「上智エース」の謙遜	武内 清
「上智エース」の虚心	武内 清
「上智エース」の誠信	武内 清
「上智エース」の厚道	武内 清
「上智エース」の温厚	武内 清
「上智エース」の仁慈	武内 清
「上智エース」の良善	武内 清
「上智エース」の淳厚	武内 清
「上智エース」の豊厚	武内 清

現代大学生論 ― 生徒化現象 ―



武内 清
(敬愛大学特任教授)

現在、大学・短大の進学率が五六・七％（二〇一一年）で、同年代の六割近くが通うようになっている。大学がエリート段階（一五％）からマス段階（一五〇％）を経て、ユニバーサル段階（五〇％以上）に入っているのである。

現代の大学生の生活と価値観の特質は何であろうか。昔と変わらないのか、変化しているのか（品位が落ちているのか）、大学生に対するデータや筆者の体験から考えてみたい。

一 三〇年前と今の学生の違い

筆者が大学（都内の中堅の私立大学）の教員になったのは一九七〇年代の末である。その頃は、大学はレジャーランドと言われた。学生たちは、大学の授業にはあまり出席せず（三割の出席があればいい方だった）、サークル活動やコンパ、交友、合コンに、大学生生活が明け暮れていた。

ただその頃は、大学・短大進学率は三割台（一九八〇年三七・四％）。大学に入学後は過酷な受験勉強の

反動で、勉強ではなく遊びに明け暮れていた。大学卒業後は猛烈サラリーマンとして働くことが宿命づけられていた彼（女）らは、受験と就職の谷間の四年間を、人生の中の唯一の休息（モラトリアム）の時期として楽しんでいた節がある。

当時の学生の描いた自画像「武蔵太郎君の一日」がある（図一）。それには次のような解説が付いている。

「朝一〇時に目を覚ます。一日の始まりだ。昨日の深酒が後頭部に残っている、辛い。でも今日は二限の



【現代大学生の受講態度とその関連要因の研究】
1985年、武蔵大学社会学科

授業に出なければ！この講義は出欠を取るから……単位を落とすわけにはいかないんだ。教室に着いたらまだ眠ればいい。教室は温かいし、先生の声もまわりの喧騒も通奏低音として環境音楽れる（後略）。

それを今の学生に見せ、その感想を聞くと、逆に今の学生の生活と心情が透けて見えてくる。

「すくどらしい生活、全く自分の為にならない」「生活リズムが乱れている」「はたしてこんな生活していいの」「大学に行っている意味がわからない」「両親に申し訳ない」「しっかりとバイトしてお金を稼げ」

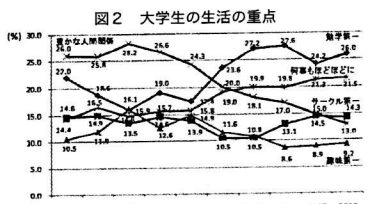
このように、遊んではかりいて、授業にもろくすっぽ出ない（出ても寝ている）当時の学生を見て、今の学生たちは、呆れている。自分たちの生活とは違うと言いつける。またアルバイトをしていないのを不思議に思う。それだけ、今の学生は、真面目であり、授業にきちんと出席して、将来の就職に備えている。またアルバイトと生活の一部になっている。

このイラストと文章には、当時の学生の素養が表れている。またユーモアのセンスにも溢れている。しかし、今の学生はそこに思ひは至らない。当時の学生

は、大学の授業には出なくても、これだけのものを書く素養を備えていた。それは、当時の大学生生活から得ていたものであろう。

二 真面目化する大学生

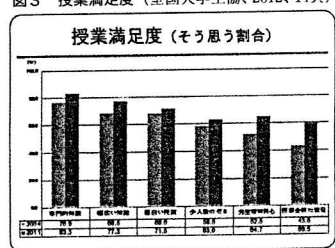
最近の学生が、真面目化、大人に近づく傾向にあることは、様々なデータに表れている。たとえば、全国大学生協の大学生調査のデータで、大学生の生活の重点の変化を見ると、一九八〇年以降、「豊かな人間関係」が減少して、「勉強第一」が増えている（図二）。この傾向が特に顕著なのは、男子学生、三年生、私立大生である。



全国大学生生活協同組合連合会「バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像」2012、18頁

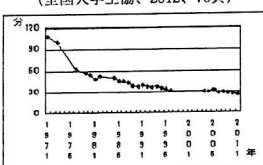
同じ調査のデータでみると、学生の授業への満足度は、年々高くなる傾向にある。

図3 授業満足度（全国大学生協、2012、14頁）



現代の学生たちが、大学の授業に熱心に出席し、授業や教員や大学に満足するようになっているにしても、自主的な学習や読書の時間が減っているわけではない。学生たちは、大学の教科書は購入しても、自主的な読書の為の、書籍費は年々減少している。大学生の一日当たりの平均読書時間は、一九七一年には一〇八分だったものが、年々激減して、二〇〇四年までには

図4 一日当たりの平均読書時間
(全国大学生協、2012、70頁)



二九分と三〇分を切り、二〇一一年には二五分になっている（図四）。かつての学生は、大学教師以外の、思想家（作家、詩人、評論家、芸術家）から多くを学んでいた。また、交友関係、サークル活動、遊び、テレビ、旅行、学生運動を通して、様々なことを学んでいた。一方、今の学生にとって、勉強＝大学の授業となり、勉強（学習）は、大学の教師から教えられるもののみになっている。経済的に苦しく、日常的にアルバイトをすることは必須になり、合宿や旅行も減っている。

現在の文部科学省のすすめる大学改革は、教育課程の体系化（シラバス等）、教育方法の改善（アクティブラーニング等）、学習支援環境の充実、教員の教育力の向上（FD等）など、入学してくる学生へ手厚い配慮、支援をするようになっている。

渡部真は、それを「伝統的大学」から「中学・高校」

なっている（図三）。それだけ、学生は教員に従順に、また真面目になっている。

三 学生の読書量の減少、自主性の減少

現代の学生たちが、大学の授業に熱心に出席し、授業や教員や大学に満足するようになっているにしても、自主的な学習や読書の時間が減っているわけではない。学生たちは、大学の教科書は購入しても、自主的な読書の為の、書籍費は年々減少している。大学生の一日当たりの平均読書時間は、一九七一年には一〇八分だったものが、年々激減して、二〇〇四年までには

へ移行する「学校化」として捉え、「自由な時間と空間」が少なくなり、「価値の多様化」「学生の自覚性」「強いモラトリアム性」が失われつつあるとしている（武内清編『キャンパスライフと大学の教育力』二〇〇九年、科研報告書）。

四 学生文化の大学差、個人差

現在（二〇一一年）全国で大学七八〇校・短大三八七校、合わせて一六七校あり、そこに在籍する学生の特質、学生文化は様々である。大学の伝統や入学偏差値に規定され、大学には大きく三つのタイプがあり、各大学の学生文化は違っていることを我々は調査から明らかにしてきた。つまり、学生が教養、モラトリアム志向の「伝統総合大学」、

教育展望

2013年4月号(第59巻 第3号)
表紙デザイン/山本 貴

わたしの教育実践275
「学ぶ喜び」のある授業実践を求めて
北海道札幌市立向陵中学校 56

現代大学生論—生徒化現象—
武内 清 36

日本の公教育はダメになっているのか
—学力の視点からとらえ直す—
広田照幸 30

大学入試の学力観を問い直す
田中博之 24

学歴社会の変質と教育の展望
金子元久 18

グローバル社会が求める教育の質
—外国語教育を中心に—
吉田研作 11

学力をめぐる「顕教」と「密教」の顛末
竹内 洋 4

特集 日本の教育の下流化を問う

巻頭言
大学入試改革が抱える課題
和田孫博 2

巻頭言

和田孫博 2

学力格差拡大がもたらす
問題と打開策
耳塚寛明 41

提言

きょういくフォーカス
道徳を「教科化」し
心に届く指導方法を
渡辺教司 46

わたしはなぜ教育の道を志したか
東 洋 48

東北の被災地から
日常からの学校の取り組みが、
命を救う
沼田義孝 50

当たり前前かがみ
当り前の学校へ
鈴木睦夫 51

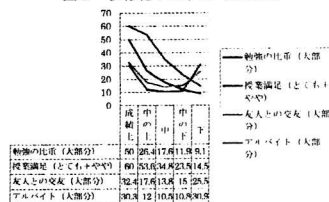
原発に一番近い学校
末永幸弘 52

ピューポイント
国家百年の大計
廣田佳次 53

展望のいふなり
「震災と語り」
「カリキュラム開発の促進条件に
関する研究」
佐藤 真 55

教育展望セミナー
おしらせ 63
あとがき・次号予告 64

図5 多様化する学生 (成績差)



武内清他【敬愛大生の素顔】2013年

学生が就職・資格志向の「新興大学」、そしてその中間の「中堅大学」である(武内清他、前掲書)。学生たちは、入学したそれぞれの大学の学生文化の影響を受け、その大学の学生らしく社会化される。

5 大学生の生徒化の意味するもの
現在情報は溢れ、またどの分野でも科学、技術、学問の進歩は著しく、自己流で学べる時代ではない。大学において、その基礎的部分を教員から学ぶ必要性は高まっている。その意味で、今の学生の大学の授業への真面目な取り組みは必要であり、好ましいことである。

また経済不況の長期化の中で、実用性のある分野や資格取得の分野への人気が高まっている。実用性や実践性の習得の中から、多くの学びはある。しかし、同時に、目先の専門性や実用性を超える学びも、転換期には必要である。それは「いま」とこの現実世界について懐疑し、自省し、現実世界を超越する理想主義につながるものである(竹内洋「学問の下流化」二〇〇八年、中央公論新社)。

現実を超越する理想への憧憬を抱きつつ、自省し、普遍的な教養や学問を希求する態度の形成も、今の学生に求められている。それは、生徒化とは逆方向の、大学生らしい高度な遊びである。



武内 清
敬愛大学 教授
【敬愛大生の素顔】2013年

教育には、子どもの内にある可能性を「引き出す」側面と、人類の文化遺産を抽出し「鑄型」に作る側面がある。この話を学生に対して最初の「教育学」の授業で話すことが多い。それに対する最近の学生のコメントに、「教育とは先生から教えられるものだけだ」と思っていたが、このような子どもから引き出すということが驚きである。

昔(私が学んだ半世紀前)は、「教育は外からの強制(受験や就職の為に)」をなくし、子どもの内なる可能性を引き出すもの」というのが優勢な考え方であった。その時は、教育に「鑄型に作る」という社会的な側面のあることを聞き、新鮮さを感じた。驚いた点、今の学生と逆になっている。これは、昔と今では優位な教育の傾向や社会状況が違っているせいであろう。

今の子どもの内にはゆとり教育が言われながらも、実際は教師による教え込みが主になっている。子ども達にとって教師の教えにくる。ことが教育の全てになっている。ネットでもさまざまな情報は得ることがあっても、それは教育(自己成長)にはなっていない。大人の目が隅々まで行き届き、子どもの自主性が育つ余地がなくなっている。子ども達は、友達にどう思われるかを気にすることに鋭敏になっていて、自分達のルールを作り出す仲間集団は育っていない。子ども達に對する手厚い保護が、子ども達の集団作りや自主性を奪っている。

半世紀前は、まだ戦後の混乱も続いており、いろいろなことが整っておらず、大人の目の届かないところも多く、子ども達の集団や自主性が育つ余地は充分にあった。仲間集団、地域での集団あそび、遊びの工夫、寄り道、自然体験など。子ども達はさまざまな場面で学んでいた。

大学においても、昔は授業への出席は強制されず、学生達は、自分に必要な授業以外には出ず、授業外のさまざまな機会を学んでいった。大学教授より野にある思想家(たとえば

しなやかな強さの形成に向けて

吉本隆明)から学問の真髄を学び、マージャンから駆け引きや勝負の厳しさを学び、文学や映画から生き方を学んだ。今の大学では、学生の出席管理は厳格になされ、教員から授業内で教えることが全てで、読書時間は減少し、学生の自主的学びは希薄になっている。各種の調査で、現代の子どもや若者の受身化、内向き、まじめ化が指摘されている。小中高生に対する調査では、以前に比べて子ども達の親への依存、内向きが進んでいることが示されている。大学生調査でも、大学生の勉強志向、まじめ化がデータで確認できる。その背景には、九〇年代から続く経済不況の影響があるだろう。まじめに勉強して、資格を取らないと、今の不況の中で、就職がままならない。さらに、学校や大学の子どもや若者達に対する管理や手厚い支援も、その傾向を助長している。

今の子どもの若者を自然状態に放置しては、溢れる情報や消費環境の中で溺れるだけで、自己成長は期待できない。そこで大人達が、子どもや若者達を手とり足とり指導し、支援しなければならぬ。教え込みの教育過剰になるのは必然である。しかし、今の子ども・若者が教育を終えて出ていく社会は、決して受け身で内向きな若者にならずに、社会で生きていくことが示すように、従順な若者では生きにくい社会である。教育はこれからの社会を生き抜くために、子どもに身に付けさせなければならぬ。それは、子ども・若者のさまざまな体験と同世代の交わり、若者文化の形成と関与、そして幅広い教養と専門知識の修得である。子ども・若者のしなやかな強さの形成に、大人は時に手を差し伸べ、時に厳しい試練を課して、教育や支援をしていかなければならない。

(1) 浦本守一「教育愛動」『教育社会学』東大出版会
一九七四年、(2) ネット教育研究開発センター「第一
二回子ども生活実態基本調査報告書」二〇一〇年、
(3) 全国大学生生活協同組合連合会「CAMPAS L
IFE DATA 2011」二〇一一年